

飛鳥Ⅱの船旅 2019

旅のチカラ研究所

2019年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

日本船籍の豪華客船「飛鳥Ⅱ」の横浜出港帰港 Xmas ワンナイト・クルーズというものがあり、妻と2人で洋上のクリスマスを楽しんできた。その船旅の様子を飛鳥Ⅱ中心に紹介する。



■なぜ飛鳥Ⅱに

豪華客船いわゆるクルーズ船の格付けは3グレードある。私たち夫婦は今年最初に中間のプレミアム船ダイヤモンド・プリンセスに乗り、次に最上位のラグジュアリー船クイーン・エリザベスに乗った。そして大衆向けのカジュアル船にも乗ろうとMSC スプレンドィダを予約した。

その頃にある人にこれらの船の話をしたら、返ってきた言葉は「それで、飛鳥に比べてどうなの？」というものだった。それと同じ言葉を妻の実家に行った時に妻の母親と話をした時にも聞いた。妻の母親は旅行好きで、私も一目を置く人物で私の良き理解者でもある。義理の父がまだ存命中に夫婦で飛鳥に乗ったということで、その良き思い出が彼女の脳裏に刻まれている。

その後も何人かと話をして分かったことは、どうやら多くの日本人にとってクルーズ船の基準は飛鳥になっているということだ。

これは飛鳥に乗るしかない。

寄港地はどうでもいいので横浜港発着の短期間クルーズを探していたら、横浜港からどこにも寄港しないで洋上で一泊して戻ってくる Xmas ワンナイト・クルーズというものを見つけた。

早速予約を入れたのが、半年前のことである。

その後に MSC スプレディダに乗船して世界基準の3つのグレードを全て体験した。今回は日本基準と言うべき飛鳥Ⅱへの乗船となる。

尚、飛鳥Ⅱも世界基準では最上位グレードのラグジュアリー船に分類される。

■飛鳥Ⅱとは

飛鳥Ⅱは総トン数約5万トン、全長241m、乗客定員872名で、3隻しか就航していない日本船籍のクルーズ船の中では最大である。しかしダイヤモンド・プリンセスなど外国船籍の船の総トン数はその2倍以上もあり、大きさでは勝負にならない。

私がダイヤモンド・プリンセスに乗って横浜の大栈橋で隣に接岸していた飛鳥Ⅱを上から見降ろした時に飛鳥Ⅱとはこんなに小さかったのかと少しがっかりした。その頃、といっても今年初めであるが、私はクルーズ船の格付けを総トン数で判断していた向きがあった。

実際にいくつかの船に乗って、クルーズ船の格付けは少なくとも大きさに関するものではないことは理解するようになった。

日本船籍と書いたが、最初はバハマ船籍「クリスタル・ハーモニー」として三菱重工長崎造船所で1990年に建造された。その誕生は大変だったという話を聞いたことがある。通常的大型クルーズ船の建造期間は契約後3年というのが一般的だが2年で建造することになり、さらに三菱重工ではクルーズ船を建造するのが50年ぶりというから何のノウハウも残っていない。これだけでドラマ化できそうな話だが、さすが当時の日本の技術力や根性で何とか無事に就航させた。

その難産の船を2006年に日本郵船グループの郵船クルーズが買い取り、大浴場を作るなど日本市場向けに大幅リニューアルして「飛鳥Ⅱ」として再デビューさせた。

それまで就航していた初代「飛鳥」は総トン数約2万9千トン、乗客定員604人とひと回り小さい。年代から考えておそらく義理の父と母はこの初代の飛鳥に乗ったに違いない。

■乗客たち

乗船すると若い女性スタッフがスカート姿のサンタクロースの服装で迎えてくれる。エントランス正面には大きなクリスマスツリーが飾られて、専属バンドの生演奏で迎えてくれる。



飛鳥Ⅱは横浜港を母港とする日本船籍の船ということもあって、乗客は日本人ばかりである。それは日本の港を発着する外国船籍の船では到底考えられないことで、私にとっては驚きの光景でもある。

次から次へと乗客たちがエントランスに入ってくる。

半分くらいの方は初めての乗船らしくスマートフォン片手に写真を撮っている、あるいは常連のようにここは私の別荘よと言わんばかりに得意満面の人もいる。いずれにしても皆それなりにお洒落をしており、よそ行きの服を着ている。カメラこそ首にかけていないが、かつての日本人の農協ツアーを思い起こす。

この船は建造も再デビューも平成であるが、私にはメイド・イン・ジャパンが世界を圧巻した古き良き繁栄していた頃の昭和後期の日本を感じる。

驚きは他にもあって、若い人や小さい子供が多いということだろう。乳児、幼児はもちろんのこと小学生や制服姿の中学生もいる。若いファミリー、カップルも多い。

さらに驚いたことはビジネススーツを着た会社員の数十人の団体も乗ってきた。話を聞くと忘年会を兼ねた社員旅行だという。金曜日出航、土曜日帰航のワンナイト・クルーズという日程だからなのか、そんな使い方があるのかと3年前までサラリーマンをしていた私にして全く予想外の利用方法に驚く。私はこの忘年会旅行を企画した幹事に会ってみたいという気持ちにさえなる。

乗船時に船室の鍵と船内の買い物などに使うクルーズカードが渡され、このカードを船の入口のカードリーダーにかざして乗船手続き、つまりチェックインが終了する。

しかしこのままだと下船時に現金精算になるのでクレジットカードで引き落とすためには乗船後にカード登録する必要がある。本日中に手続きすればいいのだが、早めに済ませておこうと私たち夫婦は5階デッキにあるレセプションの列に並ぶ。

私たちの前には数人のおばさんが話をしながら待っている。何気なく話を聞いていると旅行は手慣れたもので飛鳥Ⅱにも他のクルーズ船にも何度も乗っているような話をしており、いわゆる旅行セレブを気取っている。

そのおばさんたちの順番になる。

レセプションの受付スタッフから「ご用件は？」と聞かれ、おばさんたちはその質問に面食らったようで驚いている。恐らくチェックインをするつもりで受付に並んでいたのだろうが、チェックインは既に終わっている。

スタッフは再度「どのようなご用件でしょうか？」と聞き直すが、おばさんたちは何も考えずに並んでいたのだろう。「はあ？」と全く理解していない様子だ。むしろ「あんた何言っているのよ」言わんばかりの高慢な態度が伝わってくる。

私のすぐ前にいたおばさんが「チェックイン」と答えるが、スタッフからは「チェックインはお済ですよ・・・」と返ってくる。

再再度「どのようなご用件でしょうか？」と聞かれ、まだ並んだ理由が分かっていないので何やら内輪でもめている。

私はその旅行セレブ気取りのおばさんたちのうろたえようを見て、思わず吹き出してしまった。するとおばさんたちは、私をじろっと睨んでくる。私は口を一文字に閉じ、涼しい顔で受付のスタッフの顔を見る。

おばさんたちは睨んだついでに後ろに待っている列の人数が多いのに気が付いたのか、あるいは訳も分からず並んだことをようやく自覚し恥ずかしくなったのか、態度が少し謙虚になってきたようで睨むのをやめてスタッフに何やら小声で聞いている。

スタッフは状況を理解したようで、乗船手続きのイロハから丁寧に説明をしはじめる。多くの人はクレジットカードの登録に来ている旨も説明する。

恐るべき旅行セレブに対して、受付のスタッフはいやな顔一つ見せずに親身になった対応をしているのがとても好印象だった。私はそれを横目に見ながら別のスタッフに対応してもらった。

■船室

船室に入る。部屋はそんなに広くはないが、シングルベッド2台、テーブルにソファと標準的なものである。

私はある期待をしながらテーブルの上を見たが、何も置いていない。

なぜ期待したかという、クイーン・エリザベスではウエルカム・ドリンクとして1本のスパークリングワインがアイスバスケットに冷やされてテーブルに置かれていた。

飛鳥でも、と淡い期待をしていたが空振りに終わる。それでも冷蔵庫の中にあるお茶、水、ジュースはご自由にお飲み下さいと書かれている。

洗面所もあまり広くはないが、さすが日本船というのを2つを見つける。トイレのウォシュレットと浴槽だ。外国船ではこの2つの設備はグレードの高い船室ならばともかく、私が泊まるような一般船室ではついていない。特に浴槽は海外のホテルのように浅いものではなく肩まで充分に浸ることができる深さになっている。

■こじんまりした設備

荷物を置き、私は船内の探検に出掛ける。

屋外には小さめなプールが1つ、その前に小さなステージがあってクリスマスのペイントが描かれている。この二週間くらいのためにわざわざ描いたのだろうと感心する。



エントランスは2階吹き抜けになっているが、私がここ1年で乗った大型船は全て3階吹き抜けなので、こじんまりしているように感じる。

「こじんまり」と書いたが、この言葉の本来の表記は「小ぢんまり」で、それは「ちんまり」から発生している。「ちんまり」は小さくまとまっている様子なので別に間違っていないが、あまり良いイメージではない。私はむしろ「個人まり」と当て字をした方が合っているように思う。それは個人つまりお客一人ひとりに対応するという意味合いを加えたかったからだ。それは先ほどの受付のスタッフの対応も念頭にあってのことでここでは「こじんまり」と書いた。

屋内には各種売店、バー、ラウンジ、図書室、麻雀や将棋の部屋、パソコンルーム、ジム、そしてカジノもある。カジノは日本船なので法律上許されておらず、お金の換金できないと書いてある。

飛鳥が世界そして日本各地の港に寄港した時の記念の盾が飾ってある。普通は目に留まらないが、この光景をどこかの写真で見たことがあったので12デッキで見つけた。おそらく初代の飛鳥も含めてのものなのだろうが、比較的小さな港のものが多い。



大浴場もある。大きな浴槽にジャグジー、洗い場も日本の温泉ホテルと同じで鏡にカランがありシャンプーなどもそろっている。さらにドライサウナやスチームサウナもあり、驚くべきことには水風呂もある。ダイヤモンド・プリンセスにもサウナはあったが水風呂はなく、シャワーがあるだけだった。船における水は大変貴重なのと衛生面を考えるとシャワーになるのは十分に理解できるが、サウナは水風呂に入る時が一番気持ちいいということを知っている人の設計なのだろう。サウナ大好きな私は変なところで感激する。これもまさしく、こじんまりしている。

■エンターテイメント

飛鳥デイリーという船内新聞を見るとクリスマス特別ショーというものがある。妻はそういうのが好きなので夫婦そろって見に行く。

開催されるシアターにやって来る。開演時間のだいぶ前なのに既に8割方席は埋まっている。

観客席とステージの距離が近く一体感がありこの会場もこじんまりしているが、それでも400人～500人は収容できそうだ。乗客定員が872名なので通常はその半数を収容できる会場があり、重要な説明会や人気公演は2度同じものを実施するようになっている。

いよいよ公演が開始される。暗くなった会場にキャンドルを持った真っ白い衣装まとった男女10人程のメンバーがゆっくり入場して厳かなクリスマスソングのアカペラから始まる。そして歌と踊りを中心としたショーを展開していく。ステージに上がっている踊り手たちは、皆すらっと背が高く足が長い欧米人で、見事なパフォーマンスを見せてくれる。

そういえば私たちが乗船を待つ外から船を見ていた時に、甲板をジョギングする金髪の若い外国人女性がいたが、今その理由が理解できた。常にトレーニングをして体型や体力を維持しているのだろう。

そのトレーニングの成果か、見事なステージを見せてくれる。クラシックバレエやミュージカル、ハワイアンまで織り交ぜたレベルの高いプログラムを45分間こなし、充分に楽しませてくれた。

妻は「陸で観たら相当に高いよ」と言ってご満悦である。公演料金を払った感覚がないので何となく得をした気分になるが、高い乗船費用に含まれており決してタダではない。

残念ながら写真は禁止になっている。

別の会場ではピアノのコンサートをやっており、こちらも満員の賑わいになっている。普通のピアノコンサートではなく、珍しい連弾のコンサートだ。演奏の合間のトークでは有名なピアノ曲は連弾用の譜面が少ないので自分たちで独自にアレンジして弾いているという。だから二人の手が交錯するシーンがよくあるので、そこを見て欲しいと説明している。

確かにピアノコンサートは数多くあるが、連弾に特化したものは初めてである。そんなところに目をつけるとは実に面白い。

ワンナイトそれもクリスマスということもあり、これらの他にもクリスマス・ディスコ大会などイベントが多い。そしてとにかく元を取らないといけないという日本人の一般庶民の感覚からか、船内は大いに賑わっている。

■アフタヌーン・ティー

クルーズといえば食べることだ。

乗船して間もなくビュッフェレストランで軽食が食べられるというので行ってみた。時間的には3時頃からののでアフタヌーン・ティーに相当するのだろう。

いくつかのメニューの中にドライカレーのハンバーガーという妙な一品が目にとまる。もう少しすれば待望の夕食になるので最初は注文を躊躇していたが、その奇妙さに食い意地が隠しきれずに取材だとか言いながら、妻と分けることにして1個だけ注文する。注文するといっても代金を払う必要はもちろんない。作り置きしていないのでハンバーグを焼くきっかけに注文する必要がある。



出てきた焼きたてのハンバーガーは通常の半分くらいのサイズだが、クリスマスのリンスを付けた洒落たバスケットに入っており、揚げたてのフライドポテトが添えてある。その大きさがむしろありがたい。たくさん食べたければ2つでも3つでも注文すればいいので、日本人それも中高年を考慮しているのだろう。これもまたこじんまりしていると言っていいだろう。

ハンバーガーの味つけにケチャップやソースではなくドライカレーが使われているというのがミソで、私には初めての体験で非常に美味しかった。

それに味をしめた私はもう一つ違う種類のハンバーガーを注文する。期待の夕食はどうなるのかと心配になる。

私だけでなく妻はアイスクリームをもらいに行き、持って来て感激している。

感激の理由はアイスクリームを入れた容器が紙のカップと思いきや陶器のカップだったことだ。これには私も感激する。ゴミが出ないのと、カップを冷やしておけば保冷効果がある。容器を全て回収できる船内だからできることだろう。

そして私はすかさず置いてあるコーヒーカップの底を見る。すると NARUMI と記載されている。NARUMI は日本を代表する陶器メーカー鳴海製陶のブランドだ。

そういえばクイーン・エリザベスの食器は英国を代表する WEDG WOOD だった。

■夕食

夕食はドレスコードが指定されていて本日はインフォーマルだということで、スーツに着替えてから夕食会場のダイニングレストランに行く。

最近の私はクルーズ船に乗る機会が増えており、スーツにネクタイという姿で食べることが多い。そういったスタイルで食べて感じることは、少しお洒落をして着飾ると料理の味もドレスアップ、いやレベルアップするようということだ。

料理人が料理に真摯に向き合い一生懸命に作った料理に対し、食べる側のお客もまた真摯に、そして紳士に向き合うのが礼儀というものだろう。そこから生まれるある種の緊張感が料理の味わいをより一層高めてくれる。

本日のコースはクリスマスの特別メニューで、総料理長が挨拶しその後その本人が詳しく説明してくれる。本日のテーマは「優しい料理、そしてサーモンピンク」という。前菜から始まるコース料理は品数も多く手が込んでいる。

テレビ番組「グランメゾン東京」という木村拓哉主演の3つ星レストランを目指すドラマがあるが、その中で料理人たちが料理を必死に創り出していく姿が多くあるが、そのシーンを思い出してしまう。

味はもちろん美味しいが、一品ずつの内容については当然忘れてしまっている。特に印象に残るメイン料理があったという訳ではなく、前菜からデザートまでのコース全体で満足感が残るといふ感じだ。



上段左から右の順番で料理が出てきた。右端がメイン「黒毛和牛のサーロイン備長炭ロースト」。



左端は「トマトとアセロラのシャーベット」、左から3番目が京橋千疋屋とのコラボレーションで作られたデザートで「こぼれ落ちるサンタのプレゼント」とタイトルがついている。

クリスマスということで何人かのウェイターが赤いサンタクロースの衣装で登場して踊りを披露してくれたが、やや中途半端なパフォーマンスで急造感は否めない。

■夜食と朝食

夜食があるというので、夜の遅い時間にレストランを訪れる。夕方のハンバーガーに始まりディナーでも結構食べたが、またまた食い意地を取材とか理由をつけて食べ始める。

しかしこの夜食が実に美味しい。トマト出汁のうどんというあまり聞いたことのない料理だが、トマトの西洋風な味がうどんの出汁に活かしている独特の味わいを作っており、あまり腹も空いていない私におかわりをさせるくらいだから満足の様子が伝わるだろう。

朝食はダイニングレストランでは和食、ビュッフェレストランでは洋食中心のメニューで提供される。

洋食は大体想像がつくので和食を食べにやって来た。私たちがテーブルに着いて待っていると、ウェイターが運んできた大きなお盆の上には所狭しと小鉢やお皿が並び、朝の日本の定番料理が盛り付けられている。ウェイターがそのお盆をお客の前に置き、一人用の鍋ものの固形燃料に火を付けてくれる。朝から固形燃料の登場は珍しくないが、それは陸上での話で揺れる船の上で固形燃料に火というのは相当に思い切ったもてなしだろう。恐らくは船がある程度以上揺れたならばこの鍋の提供はないのだろう。

運ばれてきた料理で十分な量だが、サラダやデザート、飲み物などがレストラン中央のテーブルにありますとウェイターは流暢な日本語で案内してくれる。



私は見には行くが取るのをやめる。その理由はダブルヘッダーに挑戦するからだ。

それはこの後にビュッフェレストランに行くことを意味しており、昨日食べたハンバーガーが忘れられないということも手伝っている。

ビュッフェレストランは昨日とは打って変わって空きテーブルを探すのが苦勞するほどに混んでいる。それでも何とか座席を確保し、卵料理やフルーツをいただく。昨日のハンバーガーの感動の再現には至らずとも、船は既に朝8時には横浜港に入港しており港の景色を見ながら飲むコーヒーはまた格別である。

■飛鳥Ⅱに想う

朝のコーヒーを飲みながら、つらつらと考える。

飛鳥Ⅱに乗ってみた感想を一言でいうと「乗って良かった」である。こじんまりしていること、おもてなしについては既にかいたが、「良かった」という最大の理由は古き良き日本の繁栄がまだ感じられた点だろう。

豪華さにおいては大型化した外国船には敵わない。それは昨今日本の国力が落ち、経済も科学技術も衰退していく中において、ある種の勇気ももらえる場所のような気がする。

アメリカ合衆国の社会学者が 1979 年に書いた「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の中で分析された日本の戦後の高度成長からバブルまで日本経済の成長の証のようなもので、飛鳥Ⅱに乗っているとその繁栄の時代にいるような錯覚を覚える。そう感じるのは私だけかもしれないが、それが安心感や満足感に繋がって「乗って良かった」に行き着いた。

妻にも感想を聞くと、もう少し積極的に「良かったから、また乗りたい」と返ってくる。

理由を聞くと船のサイズや料理、日本的サービスはもちろんのこと、大きなポイントはお風呂だと言う。そういえば妻は夜遅くまで大浴場に行って風呂とサウナを堪能していた。

やはり日本人はお風呂が大好きだ。

■ワンナイト・クルーズ

今回の乗船は 1 泊 2 日で飛鳥Ⅱでの総滞在時間は 18 時間と短い。私は過去に 10 回くらいクルーズ船に乗っているが、短いものでも 5 日間だったので船旅の重要な要素の“のんびり感”を感じられないのは残念である。

それでも若いカップル、子供連れのファミリー、忘年会社員旅行といった多彩な顔触れは実に清々しく感じる。

そういえば今回のワンナイト・クルーズの話を私の友人に話した時、彼から「今度、そんなクルーズがあったら教えて下さい」と頼まれた。彼も奥さんもクルーズに大変興味があるが、夫婦ともに勤めており、一週間でも夫婦同時に休むのは非常に難しいという。

そういう意味でワンナイト・クルーズには日本人向けの旅行スタイルとしての可能性を感じる。それも飛鳥など有名なクルーズ船ならなおさらのことで、JR 各社がやっている 1 泊や 2 泊の豪華列車の旅の人気の高いのと同じなのだろう。

日本人は時間の使い方が下手で、長い休暇で何をしたいか分からない人が多い。そんな日本人には案外向いているのかもしれない。

そしてこのワンナイト・クルーズは日本船籍の船だけに許される特権でもある。

外国船籍の船は日本国内だけでクルーズを完結できないカボタージュ規制というものがあって、それは国際条約で認められている。そのために外国船籍の船は台湾や韓国など日本以外の国の港に寄港する必要がある、ワンナイト・クルーズは絶対にできない。

案外そのあたりに日本船の需要が多くあるかもしれない。それにしてもせめてツー・ナイトは欲しいところだ。

■旅の記録

実施は 2019 年 12 月 20 日（金）～21 日（土）の 2 日間で、具体的には以下に示す。

- ・ 1 日目 15 時の横浜大棧橋の到着、飛鳥Ⅱに 15 時 45 分に乗船、17 時出港。
- ・ 2 日目 相模湾を回遊して 8 時 30 分横浜帰港、9 時 30 分に下船。

乗船費用は 1 人 50500 円、あとは大棧橋までの往復交通費が数百円と船内の夕食で飲んだアルコールや土産に若干費用がかかった。